

ああ、わたし、浮かれてるなあ。

そう自覚しながら、それでも抑えることのできない頬のゆるみに、なのははついおかしな声を出してしまう。

「ふふふふふ、ふふ、ふ、ふふふ」

「……なのは？ どうかしたの？」

並んで歩いてきたフェイトが、怪訝そうな顔を向ける。

「あ、えっと、うん、あのね、なんだか幸せすぎちゃって」

あはは、と照れ笑いを浮かべながら頭を掻くなのはに、

「幸せか……そうだね。私も幸せだよ」

フェイトも笑顔でうなずく。

小学生の頃はほとんど変わらなかった二人の身長は、中学に入ってフェイトが急に伸びたこともあり、中学卒業を控えた今では頭半分ほどの差がついていた。

その差がなのはには心地よかった。フェイトのやや見下ろす角度になる視線はフェイトに守られているようで頼もしかったし、

「うん、フェイトちゃん」

フェイトにもたれかかる、そのときちょうど自身の頭がフェイトの肩にかかる。

これまで何度となく自分を支えてくれたその肩が、なのはは大好きだった。

フェイトは繋いでいた手を離すと、少し強く、なのはの身体を抱き寄せる。

互いの鼓動が伝わる距離。

自分の胸が高鳴ると、相手の胸も同じように高鳴ってくる。まるで心臓の動きまで同じなのではないかと思えるほどに、二人のリズムは互いに最も心地よいバランスで一致していた。

「えっと、この先の角を曲がって」

フロートウィンドウに表示された地図を確認しながら歩くフェイト。

「どんなお部屋なんだろうね？ エイミーさんはずいぶん自信あげだったけど」

「うーん、まあエイミーはちょっとオーバーだからなあ」
フェイトが苦笑する。

中学卒業後、二人は海鳴からミッドチルタの首都近郊、時空管理局の地上本部施設にほど近い郊外の街に拠点を移して暮らす予定で、今日はその新居の下見に訪れていた。

以前からずっと二人で話していた、いつか一緒に暮らしたいという願い。学生生活を終え、いよいよ管理局での仕事に全力をあげてとりかかるという段階にきて、フェイトとなのははその想いを果たすべく、新たなミッドでの生活拠点についてエイミーに相談していた。

エイミー、それにリンディやなのはの家族も、それには賛成していた。フェイトは元々こちらの出身だが、なのはは初めて自分の生まれ育った土地、いやそれどころか世界

すらも離れて、新たな暮らしを始めるのだ。

二人一緒のほうが何かと心強いだろう、と周囲の人間もみなそれを了承し、エイミーがミッドに部屋を探してくれることになっていた。

「ばーっちり、良いところ見つけておいたから！二人のらぶらぶな新生活にびったりだよ！」

人前でそんなことを臆面も無く言うエイミーに、なのは顔を真っ赤にしてうつむいてしまい、フェイトは

「ら、らぶらぶ……って」

と歯切れの悪い反論をしかけて途中で止めてしまった。

「あはは、でも休むときはちゃんと休まないとだめだよ？あんまり毎日毎日らぶらぶしていると身体がもたないからね？」

「エ、エイミー！」

「冗談冗談。地図、バルディッシュに転送しておいたから。なのはちゃんと下見に行くんでしょ？二人の愛の巣なんだから、じっくりと見て色々と検討しておいたほうがいいよ」

エイミーは一緒に来てくれないのかというフェイトに、そんなお邪魔なことはできません、と笑って、エイミーはフェイトに交通機関や間取りなど必要な情報を一通り教えてくれた。

「……もう、エイミーってば」

「あはは……エイミーさんらしいね」

思い出して顔を赤くするフェイトに、なのはもつられて頬を染める。

「でも愛の巣って、エイミーさんもずいぶん古い言い回しするなあ」

「最近、子育てですつと家にいるから、地球のテレビ番組とかにはまっちゃったらしくて……あ、あれかな」

道の先に見える、八階建てほどのマンション。エイミーから受け取った外観の写真と見比べて、フェイトはうなずいた。

「うん、あれだね。間違いないみたい」

「わわ……綺麗だね」

あまり高い建物のない住宅地の一角、やや高台にそびえているその建物は、まだ外装に汚れらしい汚れもなく、外壁の白が日の光に照らされてわずかに輝いてみえた。

「ここが一番上、みたいなんだけど」

柔らかなオレンジ色にライトアップされた正面玄関をくぐり、エレベーターで最上階へ向かう。

「えっと……あ、ここだね」

部屋の番号を確認して、エイミーから預かった鍵で中に入る。

「わ……」

「うわあ……」

リビングで、フェイトとなのはしばらく言葉を失った。十畳ほどの広さのフロアリングのリビングには、大きなキッチンが隣接されている。テラスにつながる扉は全面のガラスで、日の光をめいっぱい取り込んでいた。

テラスも広く、その向こうに見える景色は、はるか遠く首都のクラナガンまでも見渡せるのではないかというほどに広い。

風呂はシャワールームに加えてバスタブもあり、二人で入ったとしても十分な広さがある。

リビングから繋がる寝室もやはり十畳ほど。クローゼットも用意され、大きめなベッドをいれてもまだまだ余裕がある。

「エイミーさん、なにもこんな立派なことじゃなくても」

あはは、となのはが苦笑する。たしかに暮らすには申し分の無い部屋だが、まだようやく学生生活を終えたばかりの自分たちには贅沢なんじゃないだろうか。

「そうだ、これで、家賃ってどれくらいなの？」

「えつとね、これくらい」

フェイトが契約書をなのは見せる。

「ふえ……や、安くは、ないね」

「うん、まあ局からも補助が出るけど、はつきり言って高め、だと思う」

でもね、とフェイトはなのには言った。

「二人で割ればそこまで負担にはならないし、それに、ほら」

と、フェイトはウィンドウになにか数字の並んだ表のよなものを映し出した。

「フェイトちゃん、これは？」

「私たちが、これまでの六年間、管理局で仕事した分のお給料。母さんがずっと管理してくれて」

「え、うそ、こんな……に？」

そこに表示されていた金額は、数年程度であれば何もせずに暮らしているほどの、なのも予想していなかった大金だった。

なのはが局の仕事で得た収入については、リンディが一括して預かっておくことで、なのはの両親との間で話をつけていた。それはなのはの両親からの依頼で、お金はまず使い方を覚えてからが先だ、という方針によるものだった。

なのはにとっても月々にもらう小遣いだけで特に不満もなく暮らしていたため、自分がどれだけ稼いでいたのか、ということについては全く自覚していなかったのだが。

「私も最初は驚いたよ」

それはフェイトも同じだったのだろう。凄いよね、と笑いながら、フェイトは改めてその数字を見る。

「あまり多く持っていても色々と苦労するけれど、無いよりはあったほうがいいから、って母さん言ってた。だから私もそのまま受け取ったよ。これで、しばらくは困ること

はないと思う。それに」

少し困ったような顔で、フェイトは言った。

「わざと、ちょっと高めのとこ、選んだんだってさ。それをしつかり維持できるくらい頑張って仕事すれば、世界は平和になるからって」

その言葉になのはは一瞬きよとん、としたあと、思わず吹き出してしまった。

「あはは、もう、そんなことしなくたって、わたしたち、頑張るつもりなのにね」

「まあ生活費と遊びに使うお金のバランスとか、色々と言っ
てはいたけど……実際、そんなにお金使う場面ってないと思
うんだ」

これから本格的に局の仕事に従事するようになったら、
プライベートの時間はほとんど無くなるだろう、それくら
いの覚悟は、二人とも出来ていた。

なのはは基本的な地上勤務な分まだ余裕はあるが、フェ
イトは長期の航海任務などもあり、そうなれば長いときに
は半年ほど帰ってこれない場合もある。

だからこそ、一緒にいられる時間を少しでも長くするた
めに、二人は共に暮らすことを選んだのだった。

「だからまあ、普通に暮らしていればとくに困ることもな
いと思うんだけど、まず」

改めて部屋を一通り見渡して、フェイトは言った。

「家具、これからそろえないとね。いくらなんでも、床に
寝るわけにもいかないし」

わたしはフェイトちゃんと一緒ならそれでもいいけど、
思ったが口には出さず、なのははうなずいた。

「じゃあ、さっそくその貯金から?」

「うん。ここからは先は自分たちの力で、だって」

肩をすくめるフェイトに、なのはは笑う。

「うれしいな、テーブル、ソファ、ベッド、お皿にお鍋
……全部、フェイトちゃんと一緒に決められるんだよね」

これまで、服などを一緒に買いに行ったことなどはあつ
たが、これからは、自分の身の回りのもの全てが、二人で
選んだものになる。

「なのは……うん、そうだね」

フェイトがうなずくと、なのははフェイトに飛びついた。

「じゃあ、さっそくお出かけしようよ! わたし、実はい
ろいろと調べてみたんだよ。フェイトちゃんにご飯食べる
ためのダイニングセットとか、フェイトちゃんとお話する
ための大きなソファとか、フェイトちゃんと一緒に寝る
ための、ベッド……とか」

そこまで言っつて、なのはの顔がみるみる赤くなってい
くの気づき、フェイトは思わず笑ってしまった。

「あ、え、えつとね、変な意味じゃなくてね! その、あの」
身振り手振りで必死に言い訳するなのはに、

「そうなの？」

とフェイトはわざと少し大きさに首を傾げて見せた。

「え、そうなの、って？」

「私は、別に変な意味でもよかつたんだけど」

その一言になのは動きを止めた一瞬。

フェイトはなのはを抱き寄せると、何か言いかけた唇を

塞ぐように、自分の唇を重ねた。

「んんっ……」

なのはが瞳を閉じる。

舌先で、なのはの唇を軽く撫でたあと、フェイトはそつ

と身体を離れた。

「ありがとうね、なのは。じゃあさつそく、なのはが選ん

でくれたベッド、見に行こうか？」

「……！ も、もう、フェイトちゃんのばかあつー！」

頭から湯気でも噴き出すのではないかというほどに顔を

を上気させて、なのはがフェイトを両手で何度も叩く。

「ごめんごめん、ほら、機嫌なおして」

なのはの手首をとって、その身体を自分の胸元に引き寄

せる。

「ね、なのは、私、本当に幸せだよ」

「え？」

「これからずつと、二人で笑ったり、怒ったり、時々泣いたりして。そんな毎日のこと考えると、幸せすぎて、逆に

不安になるくらいだよ」

「フェイト……ちゃん」

「私、こんなに幸せでいいのかな、って。だからなのは。私と、

ずつと一緒にいてくれる？」

「フェイトちゃん、うん、ずつと、一緒にいるよ。だから

……大丈夫だよ」

なのはが、フェイトの頬にそつとキスをする。

「あ、あれ？ ほつぺたなの？」

「ふふ、これ以上は、ベッドを買ってからね」

「じゃ、じゃあ早速買いに行こう！」

「……もう、フェイトちゃんったらムード無いなあ。なん

だかいろいろ台無し」

「なのはが可愛いのがいけないんだよ」

「はいはい、わたしが可愛いのがいけないんだよね」

そう言つて笑うなのは。それを見て、フェイトの心臓が

まるで跳ねるように大きく高鳴る。

この子と、なのはと一緒にいる限り、自分はどんなこと

があつても大丈夫だよ。

そう改めて確信して、フェイトはなのはの手を取つた。

「さ、まずはどこに行こうか？ なのは姫」

「うん、えつとね、この前教えて貰つたお店なんだけど——」